

玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 21 回

福岡表警聞懐旧談 (一二)

福岡士族は福岡城襲撃に失敗し、いったん大休山に集結、それより野芥・金武方面へと移動した。率いるのは大隊長越知彦四郎である。いっぽうの大隊長武部小四郎は姿を隠し、残された部下はちりちりになり、一部が大休山で越知隊に合流している。

牲を紙上にとどめることで、鎮魂としたかったに違いない。

明治丁丑

福岡表警聞懐旧談 下

清漣野生編述

第八回

野芥には小高い山の上に櫛田神社がある。越知隊はこの神社の山に立て籠もり、周囲から官軍の兵士と巡査隊が攻撃をしかけた。野芥周辺での戦闘は一進一退を繰り返したが、結局は官軍が優勢となった。

越知隊はさらに追われ、三瀬へと脊振山の山路を歩いた。三月末から四月にかけての出来事だったが、猛吹雪に襲われることとなる。疲労と空腹に加え、寒さと雪道が彼等の行く手をさえぎった。途中で、殺されたり、自殺する者が相次いだ。

作者江島茂逸は彼らの死を、一々、書き継いでいる。おそらく関係者に取材したものだろうが、そうした儀

志、即ち武部小四郎・其弟彦鷹・毛利元樹・江藤修・高木和一郎・長野重実・筑紫準之輔・田村耐輔等の一累は、博多上洲崎町汽船問屋油徳なる旅店を利用し、爰に同寓根居とし、各方面の有連に往復しつつ、一方に於ては、汽船の入港毎に問屋の資格を以て、汽船の兵隊なり、軍用積荷の如何なるかを視察なし、窺かに謀る所ありけるが、拳兵の期迫るに臨んで

は、殊に軍艦乗組の司計官士官等を按内して、彼店に宿せしめ、彼軍艦乗取の宿謀を計算しつゝ、ありしが、彼方に於ても已に福岡士族連が拳動の穩かならざるを知り、店頭には番兵を置きて注意せしにも拘らず、此方に於ては各自密に銃器・槍・長刀等を持ち込み、その機に乗じて事を発せんとの内約をなせしも、奈何せん、警吏の取締厳密にして、事意外に出で、人数の集らざるより、今は是迄なりと、同寓の一累は、窃かに問屋油徳が一間に於て酒酌み替はし、訣別の意を表せしが、各自憤懣の余り、同坐の一人なる筑紫準之輔は酒気に犯されしが、奥の一間に在りたる軍艦主計官の一室を目標に、彼等を誅て軍の血祭りにす可しと呼び、一刀抜き持ち、その客間を目標に飛込んとせしことさへありたり。

再拳の策を施さんとして、諸方へ向け奔走中、忽ち警吏に検知せられて、其場の同志は大概捕縛・繋囚せられけり。

し、各その跡を追ひて、寄せ来る官兵を却撃す可しとの部署を定め、而して本部を金武と内野村に設け、糧餉其他の準備を為さしめたりき。

もありつれど、奈何せん、兵は疲れ、弾薬は竭き、到底全勝の見込なかりしかば、大隊長越知は衆を制して兵を纏め、一方金武へ、一方は内野へ向け退却して、後図を為す可しと命ず。

て寒威凛烈、為めに途路にて凍死せんとせしもの数名を生じ、負傷者は哀れ大體路傍にて自殺せしもの尠なからず。

是より先き、東部の同志、即ち武部小四郎・其弟彦鷹・毛利元樹・江藤修・高木和一郎・長野重実・筑紫準之輔・田村耐輔等の一累は、博多上洲崎町汽船問屋油徳なる旅店を利用し、爰に同寓根居とし、各方面の有連に往復しつつ、一方に於ては、汽船の入港毎に問屋の資格を以て、汽船の兵隊なり、軍用積荷の如何なるかを視察なし、窺かに謀る所ありけるが、拳兵の期迫るに臨んで

隊士は三々伍々分離して、間道を徑して、その地方に嚮ひ、引上ることにはなりたり。村上・久世の隊は次郎丸地方へ、越知大隊は舌間・大島の隊と共に、野芥村を指して退却す。

然して北方より退却すると同時に、西は西新町皿山口より、東は七隈原口より、台兵・巡査の追跡隊は、疾風の如く跡を逐ひ、寄せ来る。暫時して、果して原・有田・次郎丸の角に当り、砲声頻りに聞ゆ。

去れば両道共、途中より蒸返して、逆戦数回、遂に銃鎗を抛棄して、抜刀呐喊、死物狂ひとなりて防戦せしかば、さしもの敵兵も萎靡して、以て福岡に向ひ退却せり。

此時已に日は西山に傾き、味方はその勢に乗じて、尚も官兵を追撃して、その北るを追ひて、福岡表を占領せよと主張せし某々

其夜内野の本部の決議たるや、兎角に、兵士は糧餉を遣ひ次第、直ちに本部を曲淵村に移し、それより整列して三つ瀬に出張せし佐賀兵と合併し、以て轟宿に出で、而して官軍の背後を衝て、以て薩兵を応援す可し。依りて水無・三瀬の嶮に追兵を誘ひ、狭道より前後狭(挟カ)撃して、塵殺す可きを決す。

又、月成元義・原田弥蔵、其他の二名(姓名を洩す。早良郡田島地方の士族なりき)都合四名は、大吹雪の日、道傍に彷徨せしが、徒らに凍死せんよりも、一時身を脱して再拳を図る可しとの意気込にて、水無の人家に入りて休憩し、それより同村の炭焼木屋に三、四日その身を寄せ、辛ふじて当场を凌ぎ、恙なく帰り来り、其場の艱險苦楚は到底言語の及ばざるなりと、その家人に向け物語りし事が、世上に洩聞せらる、程なりしなり。



野芥村の神社宮森を木桶に取りて…戰場となった野芥櫛田神社(階段奥) = 福岡市早良区野芥4丁目

越知大隊長指揮の下、両道の隊士は追兵を防禦し、沿路なる山間谿谷の間に露宿して、各その持場に到る折柄、此夜大吹雪にし

て寒威凛烈、為めに途路にて凍死せんとせしもの数名を生じ、負傷者は哀れ大體路傍にて自殺せしもの尠なからず。